令和3年11月1日発行　春燈／第76巻第11号（毎月1回1日発行）　昭和21年7月22日第3種郵便物承認

2021 November

春燈

11月号

—通巻900号記念号—

PDF＝俳誌の salon

久保田万太郎の句

國をあげてたゝかふ冬に入りにけり

『これやこの』昭和二十一年

昭和十九年とある。十一月一日以降空襲繁しとも。〈國をあげてたゝかふ〉の気迫は国民総てにあり、学校の授業では必勝を説かれ、体育では竹槍で敵を迎え討つ訓練を。男子は兵役を志願し、女子は工場動員、主婦は銃後の守りと正に国をあげてであった。〈冬に入りにけり〉は、戦況の愈々厳しさを増していく事態を詠み、負戦も危惧されたのではないかと。

河本由紀子

PDF= 俳誌の salon

久保田万太郎の句

咲き反りし百合のなげきとなりにけり

『流寓抄』昭和三十三年

「六世尾上菊五郎の訃、到る……をりから、わが家の庭に、百合、ふたもと三もと咲く　二句」の詞書のある二句目。一句目〈かなしさは百合の大きく咲けるさへ〉。

百合の花弁は大きく優雅で、反り返ったように開く。その姿に、親交の深かった歌舞伎の名優の訃報に接し、天を仰いで嘆いている自分の心を重ねたものであろう。慶弔句、挨拶句の名手であった万太郎の面目躍如である。

田中嘉信

PDF= 俳誌の salon

主宰の句

安立公彦

秋涼し群れ咲く花の小さきにも

青空に仰ぐ帰燕よ安かれと

厨より妻の水音や秋気澄む

新米や尽きぬ思ひの終戦日

住み古りし地は古里や荔枝熟れ

PDF= 俳誌の salon

燈下集

○　中村嵐楓子

恋の少佐と呼ばれし夏も果てにけり

秋立ちぬ神の創りしキリンの斑

新涼や口ころげでるオノマトペ

父とそのおめかけさんや秋簾

秋暑し西郷どんの大あぐら

○　鷹崎由未子

盆道につかず離れず川の音

写経の筆穂先のわるる厄日かな

襟足の長きは母似秋祭

なで肩をすべる喪服や暮の秋

秋扇たたみ切れざる思ひかな

○　松本峰春

ひとり漕ぐ夏ぶらんことて自粛して

鳥獣人物戯画のひとりの夏ぶらんこ

一日のよどみ消えけり川鰍

秋祭の獅子舞ふ孫の獅子頭（灘祭・姫路市白浜町松原地区獅子舞）

鈴虫の遠退く声にわれ寝付く

○　木村傘休

神杉の日の斑まばゆき宮相撲

白々と夜風を灯す切子かな

二人して一つ流灯水に置く

菜園の物みな傾ぐ初嵐

秋の野の風のはたてに牧水碑

PDF= 俳誌の salon

○　加藤良子

九十の赤い手形や敬老会
三叉路のお稲荷さんや虫時雨
子の子の子の動画届きし秋の朝
菊薫る優しき人を悼みけり
しつかりと歩けと朝の鳳仙花

○　鈴木直充

片耳にマスクを垂らす晩夏かな
きちかうへ日の真つ直ぐに差しにけり
あさがほを咲かせて保健室しづか
盆休み家ぢゆうに風とほしけり
かなかなや駄菓子屋へ行く三輪車

○　近藤牧男

上がり框団扇が置いてありにけり
切株のあたり明るきとんぼかな
風吹けばくるりくるりととんぼの日
冷房を止めて夜風を入れにけり
躓いて双手でつかむ秋の風

○　吉澤恵美子

秋の蚊に耳うちされて刺されけり
鎌倉の山並低き秋の水
鬼やんま寺の厨を通りすぐ
青空の高々とあり秋の海
紅白の水引草の触れ合へり

○　卜部黎子

今朝秋の竿のシーツの日の匂ひ
水郷の風よどみなき稲の花
蜩や何が急かする夕べの歩
わが齢の母鑑みる盆の月
銀漢や如何に向き合ふ未知の老い

○　卯木尭子

秋の朝定番土曜の楽を待つ
老年期とは反省期桐一葉
蟄居やも歌を忘るる秋の蟬
小形なるバッグに小形秋扇
一に神二には家庭医感謝の秋

PDF= 俳誌の salon

○　深川敏子

どの家も庭ありし頃さるすべり
香水の遠くに生きて誕生日
ぬか漬のなすのるり色母の味
すぐそこに秋が来てます朝の風
パラ選手らの強固な心天高し

○　大室恵美子

野仏も日傘に入れてひと休み
高階の景もご馳走夏料理
納得をせぬも頷く残暑かな
レンジのみで作る料理や震災忌
幾年を学ぶ友垣獺祭忌

○　尾野奈津子

秋立つや暦ばかりが先走る
ひぐらしの切なき声や九段坂
新涼の風を総身に佃島
からすみや台湾流に杯を乾す
霧ごむる嘘がまことで通りけり

○　小嶋恵美

さはやかに百歳の句と笑顔かな（祝仁桐てい女様）
秋気澄むギリシアに星の物語
最強の漢の黙や鰯雲
佇みてやがて屈みぬ秋の水
月揺るるほどのさざなみこころにも

○　三宅文子

向日葵やあつけらかんと空青き
かにかくに逢ふに思案や式部の実
堂奥に観音在す涼新た
笑うた後さみしくなりぬ夜長かな
江戸の香と共に消えゆき盆の月（惇・小張昭一様）

○　太田慶子

御明かしの色かはりゆく大文字
仏壇を九月の風の覗いて来
池の面の月に風いで来りけり
貴船菊み空へ首を差し伸ばす
秋の空白い絵の具を買ひに行く

PDF= 俳誌の salon

○　青柳雅子

戛戛と白帝来る朝かな
健やかな百寿ことほぐ菊日和（祝・片桐てい女様）
わが町のハザード・マップ葛の花
過ぎし日をもどす術なし思草
実むらさき偐紫は読まざりし

○　木多芙美子

空蟬の爪の渾身生くるとは
遺影笑むただ吹き抜くる盆の風
雀蛤となり失ひしもの多し
眷属は母方ばかり衣被
括るには惜しき白萩ほつりほつり

○　小張志げ

木犀の香について行く先父母の墓
おたがひに通ずる思ひ一夜酒
老後とは線香花火の尽くるまで
衿あしを新涼のかぜなでてゆく
へのへのもへじ案山子にもある子の心

○　江草礼

ベビーカー覗けばチワワ今朝の秋
祭神に炎帝加へ砂利の道
厄払ひしたき列島水鉄砲
不知火の仲違ひして水平線
体幹を鍛へ闘ふ天高し（パラリンピック五輪）

○　岩永はるみ

指先まで元気な子ども秋高し
海光の届く校舎やカンナ燃ゆ
初秋の鶏舎に朝の光かな
あけくれの心の襞に穴惑ひ
居待月ひとりの徳利ねかせけり

○　林紀夫

八月や玉音聞きし母の膝
漆黒の湖が画布なり星月夜
山小屋の窓の小さし天の川
奥能登の釣瓶落しや波静か
長き夜や二合半酒と柿の種

PDF= 俳誌の salon

○　栗原完爾

盆花に三日の力なかりけり
盂蘭盆会煮豆のすべる箸の先
墓のこと堂々巡りや胡瓜揉む
監視カメラの上に育ちて燕の子
遠き日の片恋ひとつ桃啜る

○　本多遊方

蓮は実に千年後の世を想ふ
蜻蛉と地蔵インスタ映え確か
石畳たたく鶺鴒日和かな
墓石の芯まで沁むる秋の雨
蓑虫にこころ預けてみたりけり

○　武田巨子

不発弾今も残るや敗戦忌
墓おのれの一歩一歩かな
Tシャツの草木染の香夏惜しむ
下駄好きの少女の揃ふ踊の輪
語るかに手をうらがへし踊りけり

○　諸岡孝子

七曜にゆかりなき日々菊清し
木槿垣より大根二本の御裾分け
応へなき雁の玉梓英子の忌（迫悼宮川英子さん）
爺孫の一局ひきわけ盆帰省
星流る佐渡も遠しや世阿弥の忌

○　小泉三枝

名水の香を切り添へて新豆腐
新涼や今朝のトーストきつね色
七夕竹重き願ひに撓ひけり
天の川ピラミッドには舟二艘
金平糖いくつこぼれて流れ星

平野加代子

コロナ禍の義なる自粛の大昼寝
ドアカメラぬつと日焼の子の目鼻
ウーバー宅配で届くスイーツ終戦日
鰯雲ひとひらはらと舞うて来よ
てい女様の山の手言葉爽やかや

PDF= 俳誌の salon

春燈誌九〇〇号記念特集

令和三年十一月号をもって「春燈」は通巻九〇〇号を迎えました。昭和二十一年、久保田万太郎を初代主宰として俳句随筆誌「春燈」が発足して以来、七十六年が過ぎようとしています。その間、二代目主宰・安住敦、三代目・成瀬櫻桃子、四代目・鈴木榮子、現主宰・安立公彦まで「春燈の抒情」がいかに受け継がれてきたかを、これを機会に振り返り、改めて各主宰の文学性と会員の足跡を辿ってみたいと思います。

各主宰の内なる主張に触れる好機となり、また十七人の誌友の所感は、春燈の来し方と方向性を探る機会となれば幸いです。

九〇〇号刊行にあたって……安立公彦 30
九〇〇号記念二十句「晩夏」……安立公彦 31
創刊号より今日にいたる四主宰作品とこれから
創刊号の久保田万太郎作品をめぐって……中村嵐楓子 32
安住敦のぬくもり……三上程子 38
成瀬櫻桃子―三代目主宰への道―……鈴木直充 44
鈴木榮子の俳句世界……近藤牧男 50
九〇〇号所感Ⅰ……56
西川保子　佐藤信子　松橋利雄　鷹崎由未子　木村傘休　鈴木直充　近藤牧男
岩永はるみ　林　紀夫　栗原完爾
歴代春燈賞受賞作家特別作品十五句……66
てい女　保子　信子　露郷　利雄　程子　傘休　恵美　文子　雅子　はるみ
三枝　佳代子　博介　笑子　若菜　繁子　啓子　真樹子　晴夫　恵子
ハルエ　信子（持田）　恵子（平沢）　真啓
九〇〇号所感Ⅱ……79
太田佳代子　片山博介　矢口笑子　藤原若菜　小山繁子　浅木ノエ　近藤真啓
歴代春星賞受賞作家特別作品十五句……86
美美子　紀夫　巨子　久子　昭夫　ノエ　洋　健治　紫乃　まさを
春燈賞・春星賞歴代受賞者一覧……92

余　言

安立公彦

秋暑し己との約ここに果つ　　片桐てい女

春燈八月号を手にした人は、「おめでとう、片桐てい女さん」の見出しの特集記事を見て、挙って、「おめでとうてい女さん」と口にしたことだろう。今年の八月が満百歳の誕生日。掲出の写真は正に健康な上寿のてい女さんだ。

現在この国に百歳以上の人は、八万六千余人健在とのこと。会合などでてい女さんを見ると、百歳という言葉など忘れる思いだ。この句、「己との約」は上寿のことと思われる。この特集記事を読んだ人は、百寿への思いが、心に確かな足音とともに湧き上がる思いだっただろう。記事を書いている私たちも、祝福の末席にある思いだ。

疫神をしりへに蛇や穴に入る　　西川　保子

「蛇穴に入る」の季語は善く知られているが、実際にその景を見た人は少ないだろう。歳時記の解説を見ると、何やら無気味な思いになる。それは蛇への恐怖と嫌悪感から来るものと思われる。しかしこの句の蛇は、「疫神をしりへに」とあり、私たちの持つ蛇への恐怖感と嫌悪感を、すっかり取り払ってくれる。コロナ禍と蛇とは次元を異にする。コロナ禍など「後」にどかして、冬眠に入る準備中の蛇が、何となく近しく思われて来る。

秋めくや遠目に青き朝の富士　　佐藤　信子

作者は近年転居され、今はマンションの高階を住まいとされる。眺望の善い所と聞く。それは、「遠目に青き朝の富士」と言う中七下五に在りありと表現されている。更に「秋めくや」の上五が、その富士の姿を、遠目ながらも、みごとに不動のものとしている。都心に居て、朝の富上を望める思いが善く出ている。同時掲載の、〈青空の余白にあそぶ秋の雲〉の句もみごとだ。句心が新鮮だ。

二人して一つ流灯水に置く　　木村　傘休

「流灯」、「灯籠流し」。盆の終りの日に、灯籠に火を点し、川や海に流す行事である。昔の人は実に行き届いた法事を残したものだ。こういう行事も、地域によっては、遠いものとなって来つつある。しかし俳句はそういう行事一つをも大事に、十七文字の中で復活する。

この句は実景だ。「二人して一つ流灯」に、永く続くその地の風習が窺えるだろう。〈白々と夜風を灯す切子かな〉の句も、同時の作品。土地の風習を善く残している。

片耳にマスクを垂らす晩夏かな　　鈴木　直充

マスクは本来冬の季語であるが、二年前の「コロナ禍」以降、夏冬問わず生活の一助として、外されない日常品の一つとなった。「片耳にマスクを垂らす」はその通りだ。人の往き来のない道では、マスクは耳に垂らして行く。更に「晩夏かな」に作者の自然の仕草が善く出ている。

この句は、一句の背景に一切触れず、現実のコロナ禍の世間を善く表わしている。ここに俳句の真実がある。俳句は一部の愛好者のみの韻文ではない。

健やかな百寿ことほぐ菊日和　　青柳　雅子

先に記した片桐てい女さんの、百寿記念の記事を見て、何人もの人が祝句を出している。掲出句もその一つ。「祝片桐てい女様」の前書がある。ことほぐは「言祝ぐ」。「寿ぐ」とも書く。文字通りの祝福である。

この句は祝い句の本筋を挙げている。「健やか」、「百寿」、「ことほぐ」、「菊日和」。十七文字が全て祝の言葉である。見ていて気持が晴ればれとしてくる。俳句という短詩の、大きな表現力を感じる句である。

八月や玉音聞きし母の膝　　林　紀夫

「玉音放送」を辞書に当たると、「昭和二十年八月十五日、昭和天皇の、ポツダム宣言を受け降伏するという詔書のラジオ放送」とある。私は小学六年生、自宅で聞いた。

作者はこの玉音放送を、母堂の膝の上で聞いた、とある。忘れられない一瞬だったのだ。それは親の表情で分かる。元よりそれは歴史の大きな転換期だったのだ。今でも「八月」と聞くとその時を思い出す。この句、自らの感懐は一語もなく、客観表現のみだが、そこに俳句の確かな本質が生きているのだ。

ていねいにたたむ思ひ出秋扇　　小倉　陶女

新派の舞台を見ているような思いのする句だ。「たたむ」は、「心の中に秘めておく」の意。この「たたむ」の一語で、ていねいに、思ひ出、更に秋扇のそれぞれの言葉が活きて来る。舞台の俳優の視線が伏し目がちなのも、見てとれる。元よりこれは観劇の句ではなく、作者自身の、遠き日の思い出の句だろう。「秋扇」がことに注目を曳く。

作者は現在、誌上に、「当月集・春燈の句を読む」を連載している。心して読んでいる。

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

当月集

安立　公彦選

○　農野憲一郎

弘川寺只に莫たり雁渡し
西行に妻子ありけり葛の花
和泉野に朋を尋ぬる草虱
久しくも茅淳の海風墓参り
高野山に父の骨片露葎

○　西本花音

蜩やこころに本音置けるまま
百年の家の灯涼し太柱
猪口二つ卓に夜長の小さき幸
秋草や湖水も空も藍深め
大花野記憶の中の祖母の家

○　大谷満智子

淡海てふロマンの湖や鳥渡る
行く人の影の濃くして白露かな
法師蟬待つててくれる交差点
かなかなの波動心のセピア色
かげろふの夕べやあはき命なる

○　佐藤まさ子

鵯の鋭き声に目覚めけり
秋めくや俎板の音軽やかに
里山や自然薯掘りの鋤の音
木道を行く湿原や曼珠沙華
秋夕焼樫の大樹浮き立たせ

○　山本泰人

夏空や白波くだけ友の逝く
黒南風や隅田雨跡靴ぬらし
孫送る古オルゴール夏惜しむ
それで良し只笑み溢る盆の母
葛咲けり紀貫之の古筆切

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

安立　公彦選

終戦日名もなき花を忘られぬ　兵庫　尾崎　貞
盆の波荒磯に寄する芥もくた
秋の浜一人遊びの人の影
朝市や地産の新そば売れに売れ
父ゆきて七十八年夾竹桃　神奈川　犬嶋テル子
中継の五山送り火手を合はす
身ほとりの忌日の多き葉月かな
秋の夜の尺八江差追分よ
蓑を背に酷暑に耐ふる畑仕事　岐阜　高井　修一
義兄の忌修する心経盆の月
健常者に優る躍動天高し（パラリンピック二句）
障害をのりこえ競ふ秋の空
ホームラン打たれて涙夏の空　東京　鈴木としお
逃げ切りし高校球児暑さなく

球音に暑さ忘るる甲子園
空襲被害癒えぬ傷跡盆の月
阿呆となることの幸せ阿波踊　愛知　後藤　大
娘の帰省止めしばしの夕かなかな
大の字に老いの素肌や処暑の朝
八月に生まれ戦争知らぬ子等
初蟬やひと声残し何処へやら　東京　遠藤　レイ
救急車の音と競演蟬時雨
カット西瓜その半分は亡夫の分
卓上の琉球グラス終戦日
「泥中の蓮」祈りを筆に天に捧ぐ（平等院）　滋賀　馬場　節子
寄り添うて母との日々や終戦日
夫逝きて幾年月や盆の月
登城坂見上げ登るやつくつくし

PDF= 俳誌の salon